

## 美術の窓 (114)

直近一ヶ月の美術鑑賞  
—開館50周年に向けて—

大和文華館館長 浅野秀剛

大和文華館開館50周年を目前にし、8月中旬から9月上旬までの一ヶ月間に接した美術展について、所感を交えて述べてみようと思う。

8月15日の日曜日は秋田県大館市で行われていた「ゼロダテ／大館展2010展」の展示や諸行事を見るべく大館市内を徘徊した。徘徊とはいっても、その日はごんごん降りて少し歩くと服が濡れ靴に水が入るという状態だったので、次から次というわけにはいかなかった。ゼロダテというのはシャッター通りと化した大館の中心市街地を活性化しようと3年前から始まったアートプロジェクトである。プロジェクトのメインはゼロダテ美術展と称する商店街での展示である。1、2年目は大町商店街だけだったものが、4年目の今年は駅前から御成町二丁目、御成町南地区、栄町、田町にも広げおよそ80会場となった。もはや全部回るのはつらい規模である。規模の拡大と共に参加者も増加し、その満足度も上がればよいが、今年は雨のせいで参加者は減少しそうである。参加者が徐々にでも増え、したがって街に落とすお金も増えて行けばよいのであるが、簡単にはいかない。成功したアートプロジェクトの代表格の越後妻有トリエンナーレ(大地の芸術祭)も、大スポンサーであった県や市町村が拠出を止めると、寄付、協賛をどれだけ集めることができるか、参加者の落とすお金で運営できるか、作家や地元の人、ボランティアの協力をどの程度期待できる

かで、プロジェクトの存続が決まる。ゼロダテもいつまでも行政や各種の助成に頼った運営はできない。最終的には、お金や物を出しても、労力を提供しても続けたいとどれだけの人が望むかに係っている。結局は、作品の質が重要になる。アートプロジェクトの場合は、基本的には「現代の新しい美術作品」ということになるので、歴史的な作品よりも感動させられる作品の確率はぐーんと低くなる。それでも、半日、一日回って、ああ来てよかったと心から思える作品に、せめて一、二点は出会えなければ、次回はおそらく来ないであろう。ゼロダテの、閉まった店舗を利用した、理念先行の難解で寒々とした作品群を見てそんなことを思った。

8月27日もアートプロジェクトの調査をした。それこそ平城遷都1300年祭の中心会場である奈良市の平城旧跡で行われた光の現代美術展「時空 Between and time and space」である。当日は「光と灯りのフェア」の最終日とあって、夜の平城旧跡は大変な人出であった。ビデオ作品4点は朱雀門の白壁に投影されていたが、作品の制作意図を考えなければならぬ作品が多く疲れた。なかには平城旧跡の白壁である必要のない作品もあり、ますます疲れた。ライトインストレーション(ライトを使った仮設展示)は大極殿と朱雀門を背景にしていた(借景と称していた)ことと、単純にきれいなということでも人気を集めていた。ただし、夜の平城旧跡に映えてきれいな、ライトアッ

プした建物に映えてきれいなということ以外に強いメッセージがあったかは疑問とせざるを得ない。ともかく、たくさんの人の目に止まったというだけでも良しとすべきかもしれない。

8月21日は千葉市美術館における「田中一村 新たな全貌」展の初日であった。田中一村(1908-77)は栃木に生まれ、東京に移住し、戦前から戦後にかけて千葉に20年住み、奄美大島へ渡って亜熱帯の植物や鳥などを題材にした日本画を描き、無名のまま没した画家である。没後にNHKの美術番組での紹介が空前の反響を呼び、全国で知られるようになった人である。この作家の幸福と不幸は、幸福が晩年自由に制作することができ、死後その価値が認められ顕彰されたこととすれば、不幸は、生前に認められることなく没したこと、死後のブームも人気先行型であり、専門家の反応は必ずしも好意的でなかったことである。一村のことを研究しようとする人もほとんどなかった。ただ、そのことだけを言えば、現代の作家の場合、その作家のことを腰を据えて研究しようとする人が複数出ると、その作家は一流といえる状況にある。一村の場合は、展覧会がごとごとく盛況だったので、いやでも目についたのである。この度、関係する美術館やゆかりの地の学芸員がプロジェクトチームを結成し、新たな視点の展覧会を開催し、充実した図録を制作したことは快挙といってよい。図録は殊にすばらしく、参考図や資料が

満載である。年譜はもとより、落款一覧も完備している。驚いたのは「田中一村作品目録(モノクロ図版入全作品目録)」も具わっていたことである。私は作品をゆっくり拝見した。そして、一村がかなり癖のある、しかし非凡な画家であることを確信した。

9月2日は滋賀県にあるMIHO MUSEUMに行き、「古陶の譜 中世のやきもの一六古窯とその周辺—」のオープニングレセプションに参加した。六古窯とは、常滑・越前・信楽・丹波・備前・瀬戸をいう。今ではそれ以外の古窯も次々に発掘されて、もはや古い呼称となったが、六古窯を中心とした古窯の作品の魅力を紹介する大展覧会である。この展覧会も図録が非常に充実していて、全国の古窯の現状が巻末に付いているのには驚いた。それだけでも十分一冊の本になる分量である。

千葉市美術館もMIHO MUSEUMも、我が大和文華館も、自治体や企業・団体に支えられて運営する美術館である。世界の中で、入館料などの収入だけで運営している美術館はごくわずかしかなない。支え続ける母体は、支える価値があると思うから支えてくれるのである。支える価値とは、来館者が満足して下さること、地域の人に愛されていることであるのは疑いない。アートプロジェクトの存続もそこに係っていることも疑いない。大和文華館開館50周年を目前にして、思うのはそのことばかりである。

季刊 美のたより No.172

平成22年10月1日

発行 大和文華館